



小・中学生の対象別評価懸念に関する研究

著者	臼倉 瞳
発行年	2016
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2015
報告番号	12102甲第7876号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00143652

氏 名 臼倉 瞳
 学位の種類 博士（ 心理学 ）
 学位記番号 博甲第 7876 号
 学位授与年月 平成 28 年 3 月 25 日
 学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当
 審査研究科 人間総合科学研究科
 学位論文題目 小・中学生の対象別評価懸念に関する研究

主	査	筑波大学教授	博士（心理学）濱口佳和
副	査	筑波大学教授	博士（心理学）沢宮容子
副	査	筑波大学准教授	博士（文学）岡本智周
副	査	筑波大学教授	教育学博士 櫻井茂男

論文の内容の要旨

（目的）

本論文では、小学校高学年および中学生を対象に、友人、親、教師に対する評価懸念について「対象別評価懸念」という概念を新たに導入し、1) 対象別評価懸念尺度の作成、2) 対象別評価懸念と心理・社会的適応との関連、3) 対象別評価懸念の形成要因の検討、4) 対象別評価懸念と不適応問題との関連を調整する要因の検討という 4 つの小目的を設定し、実証的検討を行った。

（対象と方法）

小学校 5、6 および中学校 1～3 年生、計 4,455 名に対して無記名式の質問紙調査を実施した。調査は各学校の学校長に依頼し、承諾を得た学級に対して集団で実施した。本論文の全ての研究は、筑波大学大学院人間総合科学研究科研究倫理委員会の承認を得て実施された。

（結果）

第Ⅱ部では、対象別評価懸念尺度の作成が行われた。各対象に対する評価懸念の内容に関して自由記述式調査を実施して項目収集を行い、「友人に対する評価懸念」、「親に対する評価懸念」、「教師に対する評価懸念」の 3 下位尺度からなる対象別評価懸念尺度の原案が作成された（研究 1-1）。研究 1-2 では対象別評価懸念尺度の内の一貫性と基準関連妥当性が確認され、研究 1-3 では再検査信頼性と弁別的妥当性が確認された。性差と発達差を検討した結果（研究 2）、尺度全体と「友人に対する評価懸念」、「教師に対する評価懸念」では女子の方が男子よりも得点が高かった。また、尺度全体と「親に対する評価懸念」、「教師に対する評価懸念」では小学校 5 年生の方が中学校 2、3 年生よりも得点が高かった。

第Ⅲ部では、対象別評価懸念と心理・社会的適応との関連が検討された。その結果、男女で心理・社会的適応と関連する対象別評価懸念の種類が異なることが明らかとなったほか、特に「友人に対する評価懸念」が心理・社会的適応と関連することが示された（研究 3）。続いて、対象別評価懸念尺度の 3 下位尺度の高低のパターンによる類型を探索的に検討し、得られた類型と心理・社会的適応との関連を検討した（研究 4）。その結果、「全般的高群」、「全般的低群」、「平均群」、「親に対する評価懸念高群」、「学校での評価懸念高群」の 5 つのクラスターが抽出され、特に「全般的高群」の不応得点が高かった。

第Ⅳ部では、対象別評価懸念の促進要因および抑制要因の検討を行った。促進要因（研究 5）については、「友人との傷つき経験」は「友人に対する評価懸念」と、「教師との傷つき経験」は「教師に対する評価懸念」と正の関連を示した。また、男子の場合には拒否的な養育態度が「友人に対する評価懸念」と「親に対する評価懸念」と正の関連を示し、女子の場合には拒否的な養育態度が「親に対する評価懸念」と、侵入的な養育態度が「友人に対する評価懸念」と「親に対する評価懸念」と正の関連を示した。抑制要因（研究 6）については、友人、親、教師から受容される経験と対象別評価懸念との間には有意な関連は見られなかったが、子どもの心理的自律性を尊重するような養育態度は「親に対する評価懸念」を抑制する方向で関連していた。

第Ⅴ部では、対象別評価懸念と不応問題との関連における統合的葛藤解決スキルの調整効果に関する検討を行った（研究 7）。その結果、統合的葛藤解決スキルの高低に関わらず「友人に対する評価懸念」は対人場面における苦痛・回避に影響を及ぼしていたが、「友人に対する評価懸念」が高い場合、統合的葛藤解決スキルが高い者は低い者よりも対人場面における苦痛・回避の得点は低くなっていた。一方、不登校傾向に関しては、統合的葛藤解決スキルが高い場合、親からの否定的評価を恐れる傾向が高い者は低い者よりも不登校傾向が高まっていた。

（考察）

第Ⅱ部で作成された対象別評価懸念尺度は、対象別評価懸念の特徴を反映し、一定の信頼性および妥当性を保持した尺度であると言える。性差は、対象別で評価懸念を捉えた本研究だからこそ得られた知見と考えられる。小学校 5 年生の方が中学 2, 3 年生よりも得点が高いという発達差は「友人に対する評価懸念」では見られず、友人関係、親子関係、教師－児童関係に関する発達の特徴が反映されたと考察された。

第Ⅲ部では、男女で心理・社会的適応と関連する対象別評価懸念の種類が異なることが明らかとなった。特に「友人に対する評価懸念」が小・中学生の心理・社会的適応を損なう恐れが示され、仲間から自分の存在が浮いていないかどうかを常に気にし、排除されないよう気を遣いながら友人関係を維持していこうとする努力の陰で、内的ならびに外的適応が損なわれていく可能性が示唆された。また、いずれかの対象に対して高い評価懸念を抱いていると考えられる「全般的高群」、「親に対する評価懸念高群」、「学校での評価懸念高群」の 3 群の人数の総数は全体の約 5 割弱を占めており、ある特定の対象に対して評価懸念を抱く者全体の割合は決して少なくないことが推察された。さらに、「全般的高群」の不応指標の得点が高く、幅広い対象に対して高い評価懸念を抱いている児童・生徒に対しては病理化の可能性を考慮した関わりが求められると考えられる。

第Ⅳ部では、抑制要因については、子どもの心理的自律性を尊重するような養育態度が「親に対する評価懸念」の低減に有効である可能性が示され、その一方、受容経験と対象別評価懸念との間に

は有意な負の関連は得られなかった。他者からどう思われているかを気にする傾向が強い子どもの場合、受容経験の有無にかかわらず、いつ自分が仲間外れにされるかも分からないという恐れを常に抱くため、受容経験は対象別評価懸念を低減する程の効果を持たなかった可能性が考えられる。第Ⅴ部では、対人場面における苦痛・回避については、「友人に対する評価懸念」が高い場合には統合的葛藤解決スキルが対人場面における苦痛・回避を和らげる可能性が示唆された。一方、不登校傾向については、統合的葛藤解決スキルの調整効果が見られたものの、「親に対する評価懸念」が高い者に対しては、統合的葛藤解決スキルの効果が発揮されず、不登校傾向が低減されない恐れがあることが推察された。

審査の結果の要旨

(批評)

従来、特に評価対象や評価領域を区別せず、一般的な個人的傾向とし扱われてきた評価懸念の概念を、評価対象の区別を設けて個人差測定尺度の作成し、十分な信頼性と妥当性の根拠を示せたこと、そして、心理・社会的適応との間に対象ごとの独自の関連パターンがあることを示した点で、本研究は評価懸念の専攻研究に、オリジナリティのある貢献を果たしたと言える。その形成要因の検討により、親の養育態度と友人及び教師との傷つき経験が関連することが示された点も発達臨床心理学的に重要な知見と言える。統合的葛藤解決スキルが、対象別評価懸念と心理的適応との関連を調整することを示した点は、評価懸念の不適応的な機能を抑制する上で統合的葛藤解決スキルの獲得が一定の効果を生むことを示唆した点で、予防教育に対する含意がある。公的自意識との概念的異動について明確にすること、不安の適応的な側面を示すこと、性差をジェンダーの発達の中にうまく位置づけることが今後の課題として残されているが、博士論文としては完成度が高く、学術的にも価値がある論文と評価できる。

平成 28 年 1 月 12 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。